

随想（その2）



馬瀬芳知

Yoshinori Mase
1932年 神戸に生まれる
1956年 (株)平田建築構造研究入社
1969年 (株)馬瀬構造設計事務所代表取締役
現在に至る

小学校時代の思い出

My elementary school days

二年生（昭和15年～16）のころの続き

神戸の話の続き、我が家の近くに国立神戸移民収容所（神戸市生田区山本通3丁目）とよばれる施設があった。鉄筋コンクリート造4階建一部5階建の建物で、この施設は西日本各地から移民に行く人たちを集め、一定期間指導研修、健康診断など受け、渡航準備をする場所として、1928年に建設されたものであった。移民たちはこの施設を経て神戸港からそれぞれの目的地に向かったのである。余談ながら石川達三の小説「蒼氓」の舞台にもなった。

神戸市内には、東西に細長い町並みに沿うように路面電車が走っていた。グリーンとクリームのツートンカラーで、なかなか綺麗な電車であった。電車賃（乗車賃）は何処まで乗っても、大人が6銭子供が3銭（銭湯の湯銭と同じ）であった。乗り換えも車掌に告げると、乗り換えキップが貰えた。停留所は全てコンクリート造の安全地帯が設けられていた。毎年5月の港祭りには花電車が何台もつながって走った。昼夜運行され、ことに夜の電飾の美しさには歓声があがったものだった。タクシーは「円タク」といって市内であればどこまで乗っても一円であった。当時中型の国産車などなく、タクシーはアメリカ製の大量車フォードやシボレーであった。

先に述べたが、神戸には南京町や同文学堂があるぐらいで、多くの華僑が住み着いており、その中に男性は辮髪、女性は纏足の人をまれに見かけることがあった。

三年生（昭和16年～17年）のころ

担任は藤原フサエ先生（女）で中国地方の訛りのある先生だった。この先生は生徒に対する体罰がかわっていた。体罰といえば、教室や廊下に立たせる先生が多かったが、この先生は運動場

の周囲をぐるぐる廻らせたのである。そして生徒が授業中便所へ立つことは絶対に許さなかった。そのため我慢できなくなって「お漏らし」する者が男女ともあった。彼らはバケツと雑巾で後始末をさせられていた。

学校名が「国民学校令」により諏訪山国民学校と改称（16.4.1）された。

毎年夏になると、学校から団体で海水浴に行ったが、これに参加できるのは三年生からであった。先生の引率で遠くの海水浴場まで電車に乗って行かなければならなかった。今と違い学校にプールなど無かった。西宮市の海岸まで阪神電車に乗って出かけたのである。私は泳ぎが苦手で一向に上手にならなかった。泳ぎの出来る者に3級、2級、1級とランクがつけられ、帽子に黒い縦線をランク毎に1本、2本、3本と付けられた。

この時代は社会全体の衛生状態が悪く、人糞を肥料に使っていたことなどから、殆どの者が回虫を湧かしていた。学校では定期的に全校生に虫下しの「マクリ（海入草）」を強制的に飲ましていた。当日は自宅からコップを持参し、それにマクリを入れてもらい飲むのだが、なかなか飲めない者がおり、水で薄めたりして何とか飲み干していたが、なぜか私は平気で一気に飲みが来た。効き目は抜群で一両日後には成果があり、「私3匹出たで お前は何匹出た？」といった会話が聞かれた。

年に一回学芸会（文化祭）があった。学芸会のプログラムは劇、朗読、演舞、合唱などだったが、この学芸会で嫌な思い出がある。それは合唱だった。各学年合同の合唱が必ずプログラムにあり、小学唱歌、鉄道唱歌、童謡などから選曲されていた。曲目は覚えていないが、練習中のこと、音楽の先生が「この中で誰か一人変な声を出して歌っている者がいる」といって一人一人調

べはじめた。そして私の前でぴたりと止るや、「君やな」と言って「君は学芸会の当日歌に会わせて口だけ動かして声を出したらアカン」と宣告された。まだ声替りする年でなし？大勢の前で恥ずかしい思いをさせられた。しかし学芸会の本番では大きな声で歌ってやりました。ささやかな抵抗である。

この年の暮れ、あの悲劇の始まりの日がやってきた。昭和16年12月8日である。朝6時のラジオが「臨時ニュースを申し上げます 大本営陸海軍発表 帝国陸海軍は 今8日未明 西太平洋において 米英軍と戦闘状態に入れり」と報じた。大東亜戦争（太平洋戦争）の勃発である。陸軍大臣だったと思うが「この戦争は何年続くか分からない 100年続くことも覚悟しなければならない」と所謂100年戦争論をぶったが、結果的には4年弱で負けてしまったのである。なんとも見識のない大臣であった。間もなく再び大本営の発表があり、真珠湾攻撃で大戦果を上げたことを伝えた。この作戦で二人乗りの特殊潜航艇、5艇の決死隊の活躍を称え、名誉の戦死を遂げた9名の青年将校を、後に九軍神と崇め称えた。

この頃であつたらうか、長兄が「日本刀が欲しい」と無心の手紙を父に寄越してきた。私は海軍でなんで軍刀が要るのかな、と疑問に思ったが、武士の魂として欲しかったようである。父は刀の本を買い込み、鑢、目貫、刃文、在銘など調べていたが、ある日私を連れて国鉄元町駅付近の刀剣屋へいった。父はあれこれ物色していたが、買い求めた刀は無銘であったが、なんでも江戸時代の作とかで比較的反りの大きい刀であった。値段は二百円であった。この刀の末路は長くなるので又の機会に。

年が明けてシンガポールが陥落（17.2.15）し日本中が戦果に酔った。そ

して司令官山下奉文大将と英軍守備隊司令官パーシバル將軍との談判で、山下大将が「無条件降伏せよ イエスカ！ノーか！」とテーブルを叩き迫った様子が話題となった。

ご近所では隣組が組織化され少しづつ戦時色が濃くなってきた。母親達は着物を解いてモンペに縫い直して着るようになったが、あまり格好のよいものではなかった。我々学童も隣組で集まり、定められた時間に定められた道を集団登校するようになった。

また、何もかも配給制になり、通帳(米穀)とか切符を持って行かないと何も買えなくなった。我々の服とか運動靴も担任の先生に切符を貰わないと買えなかった。それも順番待ちで、なかなか順番が廻ってこなかったし、運動靴など傷み具合のチェックまでされた。また物を買うのに、決められた時間に行かないと売ってくれない物もあり、いつかになり何時も長い行列ができた。

四年生(昭和17年~18年)のころ

担任は来女木和夫先生(男)で、渾名はルンペン。背が低く(150cm位)後頭部は絶壁でゴマ塩頭。身なりもお世辞にも良いとはいえない風貌であった。当時学内では名物?先生であった。三年生までクラスは男女組であったが、四年生からは男子組、女子組に分かれた。「男女七歳にして席を同じうせず」という教えだろうか。

敵国語の使用禁止令が出たのがこの頃で、戦後笑い話になるほどの徹底ぶりであった。

こんなことがあった。私は字が下手で習字は大の苦手であった。ある習字の時間でのこと、下手な字を書いていると、来女木先生がやってきて私の作品?を見るなり、「ちょっと退いてみい」といって私の席に着き、私の筆で同じ字を書き始めた。一字書いて筆先を顔のほうに向けてしばらく眺めていたが、「この筆はアカン お母さんに言うて新しいのん買ってもらえ」と言ってお機嫌そうに席を立っていかれた。「弘法筆を選ばず」とはいかなかったようだ。

四年生の始め昼間であったが、警戒警報が発令された。警報は町中に響くサイレンとラジオで知らされた。自宅

にいたので放課後か日曜日だったか定かでないが、「防空訓練かな?」と軽く思い、高みの見物と屋根に上っていたところ、東の方角から見慣れぬ飛行機が一機かなり低空で飛来した。ちょうど私の頭上あたりで南南西方面に大きく旋回し視界から消えていった。しばらくして「バンバン」という爆発音がした。これが米空軍の日本本土初空襲(17.4.18)であった。東京、名古屋もやられたらしい。ノースアメリカンB25ミッチェルという飛行機で、胴体の上に主翼の付いた双発の中型爆撃機である。警戒警報は出たが空襲警報は発令されなかった。この時期、日本国中はまだまだ、まさかという油断があったようだ。しかしミッドウエー海戦(17.6.5)で大敗し、ガダルカナル島守備隊が惨敗(17.8) 転進(退却撤収)していたのである。だが、国民には知らされていない。このミッドウエー海戦に参戦していた、日本海軍の「竜驤」という航空母艦に私の長兄が乗り組んでいたそうだ、空母は米軍に撃沈され、長兄は刀だけ持ち海に飛び込み2時間余り泳いで、味方の駆逐艦に助けられたという。

戦略物資が不足してきたのか、御上の命により供出が始まった。まず金属類で木や瀬戸物などで代用出来るものを含めて、あらゆる物が対象となった。家庭の鍋釜からお寺の釣り鐘まで、学校も門扉から窓の手摺、そして二宮尊徳像にまで及んだ。近所の老婆が古釘を拾い集めて供出しているのが話題になり、その善行を称える記事が写真入りで新聞報道されたりした。その他宝石や貴金属類も供出の対象となった。しかし我が家では貧乏していたので供出するような宝石や貴金属は無かったと思う。

戦略物資だけではなく、あらゆる物が品不足となってきた。コメの配給量も十分ではなくなり、米に大麦や豆粕(大豆の油粕)などを混ぜて配給されるようになった。「代用食」「代用品」という言葉が頻繁に使われるようになった。代用食とは主食のことで、三度の食事に全てコメの飯とはいかなくなった。ために各家庭でそれぞれに工夫して代用食を作っていた。代用品としては、例えば二宮尊徳のブロン

ズ像が陶器製に、鍋釜が瀬戸物に、服地がスフ(人造絹糸)にと。また古新聞が多用された、たとえば便所で使うチリ紙を「落とし紙」といったが、今のB5サイズぐらいにカットして使ったり、習字に使う半紙などもそうであった。代用品ではないが硫黄マッチの出現もこの頃で、発火して硫黄が燃え尽きるまで少し時間がかかりしばらくして炎がポーと大きくなる代物であった。石鹼にいたっては泡立ちの悪いものが多くなった。

戦争に勝つためには物を大事にし贅沢を慎むことを、隣組を通じて奨励し、従わない者に対し、「贅沢は敵だ」とか「非国民」といって非難した。女性に対し「パーマントを止めましょう」と呼びかけたりした。

母親の話を少し、なかなかの働き者で、いつも夜遅くまで針仕事や編み物をしていた。貧乏所帯の上5人の子供を育てるためには、やむを得ないことかも知れないが、徹底して物を大事にしていた。破れたりすり減ったりした着物は、捨てることなく縫ぎを当てて使った。私の普段着はほとんど兄たちのお古で、上着は肘、ズボン尻と膝の部分に縫ぎの当たったものが多かった。また毛糸で編んだチョキ(ベスト)やセーターなどは、何度も解いては編み直していた。母親は編み物が得意で近所の人によく教えていたし、編むのが凄く速かった。私もよく手伝わされた。ヤカンにお湯を沸かし。注ぎ口に毛糸を伸ばす器具を取り付け、縮んだ毛糸を伸ばし、それを玉にするといった事を。こんな生活環境から母親はよそ行きの服を特に大事に扱っていた。よそ行きの服を着て外出から帰ると即「着替えなさい!」が口癖だった。

学校では物を大事にし健康に役立つと始めたのが、裸足の励行であった。朝登校するとすぐ裸足になり、教室だけでなく校庭でも裸足で、下校するまで靴を履かない、そうする事で健康に役立つとともに運動靴も長持ちするというものである。先生も生徒もこれを実行した。裸足になることは苦痛ではなかったが、冬の朝礼は辛かった。霜焼けやアカギレになる者が多く出たりした。